

# 5 学年の実践記録

## (1) 主題に迫るための具体的な手立て

[手立て1]

- ・ 第一次では、地域行事を生かし、児童が自ら課題を見出し、探究していこうという課題意識をもてるようにするとともに、次の活動へとつなげていくことを目指す。

[手立て2]

- ・ 第二次では、各教科・領域での言語活動を生かし、手段・場・方法を工夫した追究活動を効果的に位置付ける。また、調査結果や専門家の話について、意見を出し合い検討することで、大蔵川に対する自分の見方や考えを一層明らかにしていく。
- ・ 第三次の発信の場面では、各グループの中間発表を聞いて、表現内容や表現方法についての感想や改善点を話し合う場を設定し、地域の方に大蔵川のよさや地域の方や自分の大蔵川への思いがよく伝わるかという視点で感想や改善点を話し合う。その後、地域の方に発表し、大蔵川のよさについて話し合ったり、称賛してもらったりすることで、地域に対する愛着の気持ちをもてるようにする。

[手立て3]

- ・ 第三次では、二次と同様に各教科・領域での言語活動と関連を図るとともに、学年で付けたい力を明確にした評価規準を設ける。また、国語科の学習を生かし、自分たちが調べた「大蔵川のよさ」を地域の方に伝える方法を考えたり、調査内容が「大蔵川のよさ」を立証できるものであるかどうかを、友達と整理したり分析したりし、意見を出し合い、検討する。
- ・ 第二次や第三次などの学習において、どの教科のどの内容が関連しているのかを明確にし、各教科の学習中においても、子どもたちに総合的な学習の時間との関連を意識づける。

## (2) 研究の実際と考察

[手立て1]

第一次では、体験活動をもとに、児童が自ら課題を見出すことができるように、地域行事の大蔵川清掃に参加するようにした。さらに、事前指導として、「大蔵川についてこれまで学習したこと」や「大蔵川について知っていること」「これまでに体験したこと」などを、話し合うようにし、体験後も、各自の気づきを交流し、分類・整理する活動を位置づけ、子ども達一人一人が課題意識をもち、自らの課題をもとに学習単元を設定することができるようにした。

第一次1時の「大蔵川」をテーマに、昨年までの学習で調べたことや知っていることを話し合う活動では、子どもたちから、低学年時に、川遊びをした経験や、犬の散歩をした経験、また、雨天増水時の川の様子等の体験的な意見が多かった。また、昆虫や植物・魚等の生き物の豊さに触れる意見も多かった。これに関しては、特に、絶滅危惧種である「オヤニラミ」についての発表が多かった。これは、本校で毎年取り組まれている大蔵川の学習の発信をうけてのことであると考える。つまり、子どもたちの中にも、系統性を感じ、大蔵川の学習への意欲を高めているといえる。

2時の大蔵川クリーン作戦では、意欲的な態度が見られた。(資料1) 草の中や川底、石の下などのごみも一生懸命探し、きれいにしようとしていた。これは、大蔵川への愛着であるとともに、大切にしようとする姿であると考えられる。また、それらの活動の中から、川水の冷



資料1  
大蔵川清掃の様子

たさ、深さ、流れの強さなどの川の様子や、沢蟹などの川の生き物、水草などの植物について話している姿もあった。これは、子どもたちが体験的に「大蔵川」への関心を高めている様子であると考える。

3時の大蔵川清掃をして気付いたことについて整理し、調べたいことを話し合う活動では、第1時であげた、既存の知識に第2時で感じられた体験的な気づきをすべてあげ、分類・整理する活動を行った。(資料2) K J法をもとに分類する活動の中で、子ども達が付箋にメモしている言葉を補うように説明し合いながら分類している様子が見られた。これは、これらの付箋一つ一つが子どもたち自らの課題になっているとともに、主体的に大蔵川の学習へ取り組んでいこうとする態度の表れであると考える。

これらの活動を通して、子どもたちは、一人一人が課題意識をもち、自らの課題をもとに学習単元を設定することができていた。



資料2  
分類・整理の様子

### 〔手立て2〕

第二次では、各教科・領域での言語活動を生かし、手段・場・方法を工夫した追究活動を効果的に位置付けることができるように課題ごとのグループ活動を行った。また、大蔵川に対する自分の見方や考えを一層明らかにしていくことができるようにするために、調査結果をまとめたり、専門家の話を聞く場を設け、それらをもとに、意見を出し合い検討したりするようにした。

第二次1・2時のグルーピングをし、「企画・計画会議」を行い、活動内容を決めて、調べ学習の計画を立てる活動では、自分たちの課題を明らかにするためには、何を調べればよいのかという追究の視点を明確にするとともに、GTとの調べ学習やインタビュー、アンケート調査などの手立てを考慮することができていた。

3時の調べ活動では、各グループで考えた方法を熱心に行っている姿が見られた。(資料3) GTへのインタビュー活動を行うグループでは、インタビューする内容を事前に検討し、質問内容がその後のまとめにどのように関連していくのか考えることができていた。また、アンケート調査を行うグループも同様に、アンケート実施対象を検討したり、内容を検討したりする活動を行い、見通しをもって取り組むことができていた。現地調査を行うグループは、調査対象を数値化できるように探したり、GTと共に、流水速度や水深、水質調査を行ったりするなど、科学的な活動を行うことができていた。

これらのことから、子どもたちは、大蔵川に対する自分の見方や考えを一層深めることができていたといえる。



資料3 大蔵川清掃の様子

また、第三次の発信の場面では、地域の方に大蔵川のよさや地域の方や自分の大蔵川への思いがよく伝わるかという視点で感想や改善点を話し合うことができるようにするために、各グループの中間発表を行い、意見交換する場を設けた。

第3次2時の各グループの中間発表を聞いて、感想や改善点を伝える場面では、改善点を述べる場面を明確に持ち意見交換を行うことができていた。まず、子どもたちが改善点を明確に見つけ出すことができるようにするために、視点を明らかにするプレ発表を行った。プレ発表では、7年生の先生をアドバイザーとし、中間報告する内容を一度聞いていただき、発表の仕方やまとめ方等のアドバイスをもらえるようにした。(資料4)その後、各グループが頂いたアドバイスを学級全体で分類・整理することでアドバイザーが出したアドバイスが「妥当性：掲示されている写真や資料、グラフや表はテーマ(各班の内容)を伝えるものとなっているか」「説得性：聞き手を納得させる情報の量・質となっているか」「価値性：(発表やまとめの中に資料からの考察があり、それが)「大蔵川のよさ」を伝えるものといえるか」の視点にまとめられることを体験的に捉えられるようにした。さらに、そこで獲得した視点をもとに、中間報告を行った。



資料4  
アドバイザーからアドバイスをもらう様子

アドバイザーのアドバイスを分類・整理する場面では、各チームのアドバイスを見て、「同じだ!」と気づき、自然と分類していこうとする姿が見られた。(資料5)これは、子どもたちが自ら改善する視点に気づき、推敲していくときの見方や考え方を獲得している姿であると考えられる。さらに、その後の意見交換会では、獲得した視点をもとに、資料の量や質、発表の仕方等についての意見が多く聞かれた。(資料6)これは、子どもたちが改善の視点を活用することができる姿であるといえる。



資料5  
アドバイスを分類・整理する様子

これらの活動を通して、子どもたちは、地域の方に大蔵川のよさや地域の方や自分の大蔵川への思いがよく伝わるかという視点で感想や改善点を話し合うことができ、探究的な学習を一層充実させることができていたといえる。



資料6 獲得した視点をもとに意見交換(中間報告)を行う様子

### 〔手立て3〕

第二次や第三次などの学習において、どの教科のどの内容が関連しているのかを明確にし、各教科の学習中においても、子どもたちに総合的な学習の時間との関連を意識づけることができるように、指導・助言を行った。特に、意見交換や検討する場面においては、国語科の学習を生かして学習するようにした。

第二次の調べ学習の場面では、生き物の生態や生活環境に興味関心をもって追究する姿が見られた。これは、理科「生命のつながり(3)」との関連が図れた姿であるといえる。また、質問をあらかじめ準備して聞いたり、その場で話に合った質問に変えて、インタビューしたりする姿が見られた。これは、国語科『『きくこと』について考えよう～きいて、きいて、きいてみよう～』の関連が図れているといえる。

第三次1時の調べたことをグループで新聞などにまとめる場面では、たくさんの内容を、項目を分けて、箇条書きで、短い文章で書く姿があった。これは、国語科「活動を報告する文章を書こう」の学習との関連が図れているといえる。(資料7)

3時の友達からのアドバイスを基に、改善点について修正を加える場面では、国語科「自分の考えをまとめて、討論しよう～インターネットを使って調べる」で学習した、自分の主張点を先に言い、その後に、相手に伝わるように理由を言うことができていた。

さらに、本実践を行った後に学習した理科「流れる水のはたらき」では、流水のはたらきと護岸の様子から、大蔵川の様子に関連付けて考える様子がみられた。同様に国語科「理由づけを明確にして説明しよう～グラフや表を引用して書こう～」の単元では、グラフや表を引用して、理由づけを明確にして説明する活動をいかして、再度、発表資料の見直しを行った。

これらの活動を通して、子どもたちは、他教科との関連を図って学習を進めていくことができていたといえる。



資料7  
子どもたちのまとめ

### (3) 成果と課題

アンケートの結果から、以下のような成果と課題があげられる。

#### 〔成果〕

- 「総合的な学習の時間をして、調べたいことの情報を集めたり、調べたいことを整理したり、まとめたりすることができましたか」という問いに対して、「たくさんできた・できた」と答えた子どもが77.1%いた。「少しできた」という子どもも含めると、全ての子どもがあてはまった。また、「総合的な学習の時間の学習をして、友だちの意見や考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったりすることができましたか」という問いには、「たくさんできた・できた」と答えた子どもが71.4%いた。「少しできた」という子どもも含めると、97.1%の子どもがあてはまった。このことから、本実践において検討し実施した学習は、探究的な学習を一層充実させる手立てとして有効であったといえる。
- 「国語・社会・算数・理科などで学習したことを、総合的な学習の時間に思い出したり、つかったりできましたか」という問いに対し、「思い出したり使ったりできた」「少し思い出したり使ったりできた」と答えた子どもが85.7%いた。これは、子どもたち自身が他教科との関連を意識して学習するうえで有効であったといえる。さらに、「他教科の学習のどんなことで役に立ったか」という問いに対して6割以上の回答を得られた項目として「話し合いをすること」「活動の計画をたてること」「調べたことをまとめること」「調べたことを整理すること」の項目があげられた。これは、他教科との関連を図った学習の中でも特に、探究的な学習との関連が深いことを意味していると考え

る。今後は、その点において、より焦点化した関連を位置づけることで、成果を検証していく余地がある。

- 「総合的な学習の時間の学習を通して、学んだことを教えてください」という問いに対して以下のような回答が得られた。

- ① 大蔵川には、浅い歴史も深い歴史もたくさんあって、とても昔からある町だということ。
- ② ぼくは、川の速さや断面積のことについて学んだ。
- ③ 大蔵川の行事は、大蔵の自然のためにしている。
- ④ 大蔵川にはいろいろな魚がいて、その魚は隠れる場所のあるところにいた。
- ⑤ 話し合いをすることの大切さ
- ⑥ 僕は大蔵川に関わる人について調べて、人には、様々な大蔵川に対しての思いがあると分かりました。
- ⑦ 大蔵川にもたくさんの植物があること。それらをたくさんの人が大切にしているということ。
- ⑧ 大蔵のまちには優しい人や自然がたくさんあることが分かった。

①②③④にあるように、大蔵川の具体的な内容についての学びを深めたり、⑤のように、学び方に関する意見を記述したりする子どもが多くいた。さらに、⑥⑦⑧のような意見を書く子どももいた。これは、「大蔵のまちや人を調べたり、友だちと一緒に学習したりして、自分の考えは広がりましたか」という問いに対して「とても広がった」「広がった」と答えた子どもが 88.6%いたことや、「総合的な学習の時間の学習で大蔵のまちや人は好きになりましたか」という問いに「とても好きになった」「好きになった」と答えた子どもが、88.5%いたこと、「大蔵のまちをこれからも大切にしていきたいですか」という問いに「とても大切にしていきたい」「大切にしていきたい」と答えた子どもが 97.1%いたように、総合的な学習の時間の学びを通して、その内容や学び方だけでなく、大蔵という地域に対する愛情や愛着が芽生えてきた姿であるといえる。

#### 〔課題〕

- 「総合的な学習の時間の学習をして、友だちの意見や考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったりすることができましたか」という問いに「あまりできなかった」という子どもが、2.9%いた。これは、話し合い活動において、自らの意見をもつことができなかつたり、意見を受け入れてもらえなかつたりしたという経験からであると考え。今後は、学習メンバーの構成や指示的風土の醸成も含めて、学習していく必要を感じた。
- 「国語・社会・算数・理科などで学習したことを、総合的な学習の時間に思い出したり、つかったりできましたか」という問いに対し、「あまり思い出したり使ったりできなかった」と答えた子どもが 14.3%もいた。これは、総合で学習した内容を他教科で活用したり、他教科で学習した内容を総合で活用したりするような活用場面の位置づけが十分にできていなかったことと、総合の学習と関連ある教科の学習をするまでの期間があきすぎていたためであると考え。そこで、今後は、教科横断的に関連の深まりをはかれる単元展開の工夫が必要であると考え。
- 「大蔵のまちや人を調べたり、友だちと一緒に学習したりして、自分の考えは広がりましたか」という問いに対して「あまり広がらなかった」と答えた子どもが 11.4%いた。これは、既存の知識からの新たな驚きや発見がなかったためであると考え。今後は、実態把握を十分に行い、内容を吟味し、子どもの知的好奇心を高められるような新たな展開を工夫していく必要がある。